

今週の為替相場見通し(2024年2月13日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		147.62 ~ 149.57	149.26	147.50 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.0722 ~ 1.0796	1.0784	1.0730 ~ 1.0840
(1ユーロ=)	(円)		158.94 ~ 161.24	161.02	158.50 ~ 164.00
英ポンド	(ドル)		1.2518 ~ 1.2643	1.2631	1.2300 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	186.18 ~ 188.87	188.54	186.00 ~ 192.00
豪ドル	(ドル)		0.6469 ~ 0.6540	0.6526	0.6470 ~ 0.6620
(1豪ドル=)	(円)	*	96.21 ~ 97.46	97.39	96.90 ~ 98.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 147.50 ~ 151.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

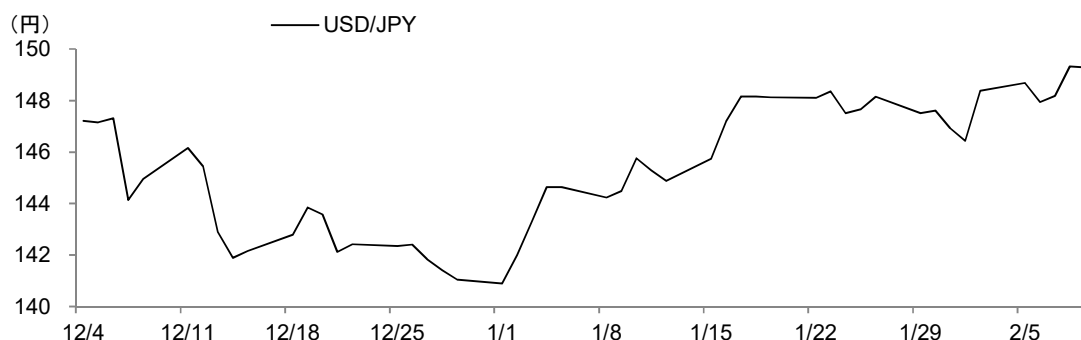
先週のドル/円相場は、年初来高値を更新して149円台半ばまで上昇となった。週初5日、148.51円でオープンすると、東京時間朝方にパウエルFRB議長による3月利下げに消極的な発言のヘッドラインを受けて上昇。また、米国時間に発表された米1月ISM非製造業景気指数が事前予想を上回る結果となったことで148.90円まで上昇となった。6日、米国時間に複数のFRB高官からタカ派発言が相次ぐもドル/円は反応薄く、米金利低下を背景に148円を割り込む水準まで下落となった。7日、米国時間に米地銀株下落に伴うリスク回避の動きを受けて一時は週安値の水準までドル売りの展開となるも、すぐさま148円台前半まで値を戻す展開となった。8日、東京時間に内田日銀副総裁による「仮にマイナス金利を解除しても緩和的な金融環境を維持していく」との発言を受けてドル/円は上昇。米国時間には米新規失業保険申請件数の強い結果やバーキン・リッチモンド連銀総裁によるタカ派発言を受けて149.48円まで上昇してそのまま高値圏で引けた。9日、特段の材料なく狭いレンジ推移となった。海外時間に発表された米10~12月期消費者物価指数(CPI、改定値)は変更なく、発表前後で上下に振れたものの、その後は方向感のない推移となり、ドル/円は149.30円付近で越週した。

今週のドル/円は高値圏でのみ合いを予想する。直近ではFRB高官からの早期利下げに関して否定的な発言が見られる一方で、日銀に関しては植田総裁・内田副総裁から緩和的な姿勢を継続するとの発言が発せられたことから日米の政策スタンスの違いが改めて意識されている状況。基本的なスタンスとしては円安・ドル高のトレンドは変わらないのではないだろうか。今週は13日(火)に発表される米1月CPIの結果に注目が集まっており、事前予想にて前年比で+2.9%の上昇と前回発表から上昇率は低下が既に見込まれている状況となっており、CPIの結果を受けて利下げ期待が再燃する可能性も低いと考える。一方で、150円を上抜けると市場参加者は政府・日銀による為替介入に関するヘッドラインが意識され、上昇余地も限定的であり高値圏でのみ合いの展開が続くと予想。今週は米1月CPI以外にも、15日(木)に米1月小売売上高、16日(金)に米1月生産者物価指数の発表と重要度の高い経済指標の発表が控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

安値 147.62 円 高値 149.57 円 終値 149.26 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 1.0730 ~ 1.0840 158.50 ~ 164.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、小幅に下に往って来いの展開だった。5日の東京市場は1.0780でオープン。日本時間は横ばい推移だったが、欧州時間に入ると前週からのドル高トレンドが継続し、ユーロは売られる展開。北米時間ではFRB高官よりタカ派な発言が聞かれ、米1月ISM非製造景気指数が事前予想を大幅に上回ると一段とドル高となり、1.0730を割り込んだ。6日の東京市場では1.0740台で横ばい推移となったが、欧州時間で発表された独12月製造業受注が事前予想を大幅に上回ると、1.0760を上抜け。ただ、上値は重く、ユーロ/円やユーロ/ポンドの売りに押され、週間安値となる1.0722を示現。その後北米時間ではやや反発。7日は東京時間に1.0760を挟んでの小動きだったが、海外時間では特段の材料がない中、緩やかに上昇。8日はユーロ/円の上昇に連れられる流れで、上伸。ただ、北米時間では米金利上昇を見ながら1.0740付近まで一旦下押し。9日は欧州時間に独1月消費者物価指数(CPI、確報)を順当にこなし、北米時間では一時1.0796の週間高値をつけるも一段高とはならず1.0784で越週した。

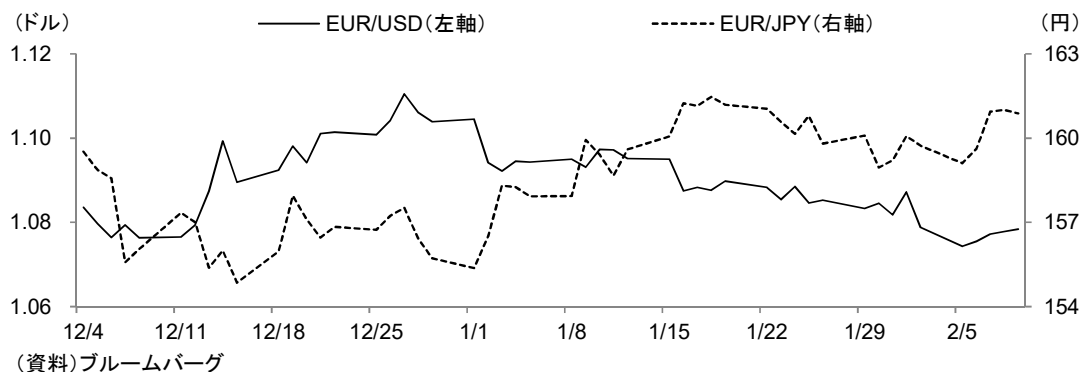
今週のユーロ/ドル相場は、方向感の見出せない展開を想定。予定されている経済指標で最も注目なのは13日(火)の米1月CPIだろう。ただ、物価指標であるため事前予想から大幅に離れるような結果とはならないだろう。14日(水)にユーロ圏10~12月期GDP(改定値)、15日(木)にユーロ圏12月貿易収支と続く。指標にサプライズなくば、チャートの的には先週2回押し戻された1.0720のレベルは昨年の12月前半にもトライして抜けられなかったライン。短期的には下値目途として考えても良いのでは。積極的にユーロを買う材料こそ見当たらないが、ドルインデックスに目を向けると、先週ピークアウトしたかのようなチャートとなっており、ドル安を示唆か。ユーロのチャートに戻ると一目均衡表の雲の下限が1.0830レベルにあり、同レベルを上値の目途の一つとして頭に入れておきたい。データにサプライズがなければ現状レベルで方向感のない動きとなる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0722 高値 1.0796 終値 1.0784

(対円) 安値 158.94 高値 161.24 終値 161.02



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2800 186.00 ~ 192.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンドは、週初の5日は対ドルで下落で始まったものの、6日以降は持ち直した。外部要因としては2日発表の米1月雇用統計の強さや、パウエルFRB議長のテレビインタビューが重しとなった一方、英国国内の要因では住宅ローン金利の低下を受けて住宅価格が予想以上に持ち直したことがサポート材料となった。BOEの政策委員会のメンバーでは、マン、ハスケル、ビル、ブリーデン各氏の発言が伝わっているが、タカ派、中立の各自の立ち位置を改めて確認するものに留まっている。ポンドは他の主要通貨に対しては、対ユーロではほぼ横ばいとなった一方、対円では上昇。日銀の植田総裁や、内田副総裁の発言から、日銀がマイナス金利解除後も連続して利上げを行う可能性が低いとの見方が強まった。

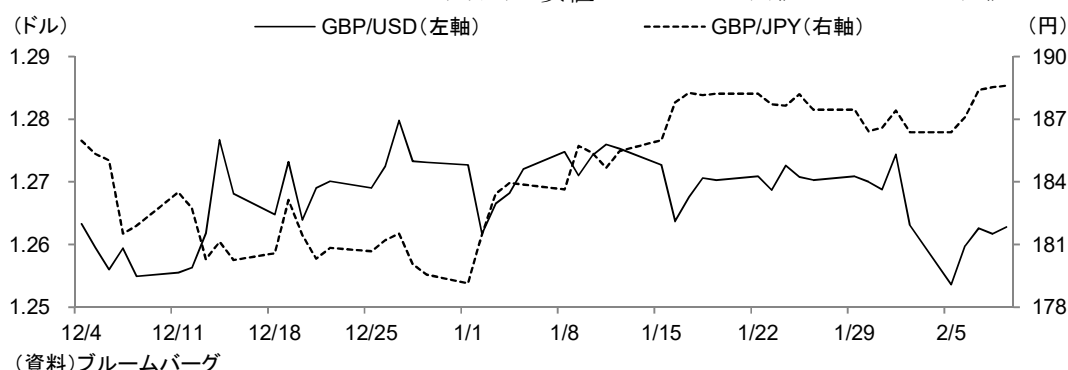
今週のポンド相場は、13日(火)発表の米1月消費者物価指数(CPI)を控えて為替市場は神経質な展開となろう。英国でも重要統計の発表が目白押しとなる。13日(火)には労働市場関連統計及び英1月CPIが発表される。CPIのヘッドラインの数値自体はエネルギー価格の動向を考慮すれば、12月の前年同月比+4.0%からやや加速する公算が大きい。より重要なのは、賃金の伸びの鈍化傾向が継続するか、賃金との関連性の強いサービスインフレの高止まりに鈍化の兆しが見られるか、であろう。15日(木)には2023年10~12月期の実質GDP成長率が発表される。7~9月期は前期比▲0.1%であり、2期連続のマイナス成長となれば英国は定義上のリセッション(景気後退)入りとなる。10~12月期の小売売上高の低迷を考慮すれば、そのリスクは高いと思われる。さらに、16日(金)には英1月小売売上高が発表される。12月は前月比▲3.2%と記録的な落ち込みとなっただけに、前月比ではプラス転換が予想される。1~3月期は、インフレ率の低下に伴う実質賃金の上昇、BOEの利下げ織り込みに伴う金融環境の緩和、各種信頼感の改善、といった要因を背景に英経済の持ち直しが見込まれるが、まずは1月分の小売売上高でどの程度の回復の勢いになるかを見極めたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2518 高値 1.2643 終値 1.2631

(対円) 安値 186.18 高値 188.87 終値 188.54



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6470 ~ 0.6620 96.90 ~ 98.40 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.65を挟みもみあい。5日、前週からの豪ドル売りの流れを受けて売りが先行。アジア時間内は0.65付近にある心理的抵抗線を何度かトライする値動きが継続した。NY時間に入り米金利が上昇幅を拡大する中、豪ドルは一段と下値を追う動きとなり、あっさり0.65を下抜け。昨年11月以来の安値0.6469まで下落した後、小幅買い戻されて0.6480付近で引けた。6日、RBA会合を控えて序盤は小動き。RBA理事会ではオフィシャルキャッシュレートを4.35%で据え置くことを決定。声明文ではインフレは尚高く、追加利上げの可能性は排除出来ないとの文言もあり、市場が予想していたほどハト派化しなかったとの解釈で豪ドルは買いで反応した。しかし、豪ドル買いのモメンタムは長く続かず0.6525まで上昇したところで弾かれた。7日、前日からの米ドル売りの流れを引き継ぎ、小高く推移。一旦0.6540まで上昇後は反落し、0.6520で引けた。8日、シドニー時間は直近抵抗線となっている100日移動平均線の0.6538を再びトライする展開が続いた。日中、内田日銀副総裁が「どんどん利上げをしていくようなパスは考えにくく、緩やかな金融環境を維持していく」と表明した事を受けて豪ドル/円が96.60円付近から97円台に上昇する動きとなり、豪ドルは下値を支えられた。但し、中国1月消費者物価指数(CPI)が15年ぶりの大幅下落となり、中国のデフレ圧力が意識され始めると豪ドルの重しとなり、抵抗線を上抜け出来ずに反落。その後、米新規失業保険申請件数が3週間ぶりに減少し、労働市場が依然堅調である事が示されると、更に米ドル買いの流れとなり、豪ドルは0.64台後半で引けた。9日、NY時間に入り、米CPI年次改定では下方修正が確認され、米ドル売りが強まり豪ドルは上昇した。株価の続伸も下値を支え、0.6526で引けた。

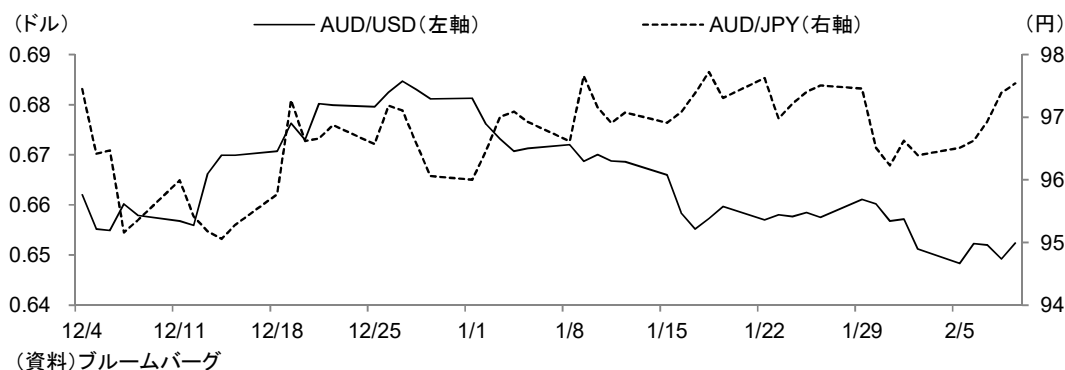
今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。今週は中国旧正月の為、アジア時間帯の流動性は低下する見込み。今週は13日(火)米1月CPI、15日(木)豪1月雇用統計、米1月小売売上高、16日(金)米1月生産者物価指数などが注目材料となる。米1月CPIの事前予想は前年比でヘッドライン+2.9%、コア+3.7%と、前回から更に上昇幅が低下する見込み。先週のRBA会合では期待されたほどハト派的な内容では無かったことから、本日の米CPIが順調に低下していることが確認できれば、豪ドル上昇トレンドのきっかけとなる可能性がある。足許、米国では堅調な企業業績やソフトランディングへの期待感を背景に株価の高値更新が続いており、先週金曜日にはS&P500が終値で初の5000大台を上回った。過熱感を警戒する向きも多いが、S&Pがこのまま5000台をキープできれば、強気相場に弾みがつく可能性もある為、株価の推移にも注意を払いたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(2/5~2/9)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6469 高値 0.6540 終値 0.6526

(対円) 安値 96.21 高値 97.46 終値 97.39



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。